

アマゾン・ドット・コムは、10月7日、電子書籍端末「Kindle」（これまではアメリカのみで発売）を、日本を含む100カ国以上で発売すると発表した。アマゾンのアメリカ版の通販サイトで予約を開始し、19日から発送されるという。当面は、英語の書籍や新聞が中心になるが、「日本語の書籍も提供していく方向」というので、近いうちに、Kindleで日本の本が読める日が来るだろう。現在、アマゾンは、自社の配信サイトで、20万冊以上の電子書籍を販売しており、Kindleには1500冊分の書籍を保存することができる。

また、一般の書籍に比べて安い値段に設定されているから、今後も、書籍のデジタル化がますます加速していくものと思われる。

このニュースを知って、私が思ったのは「やはり」ということだ。すでに、ソニーもサムソンもこの市場を狙って参戦しており、市場自体も伸びている。だから、世界発売は遅すぎたぐらいだ。ただ、Kindleはこのデジタル時代に、ややおくれた中高年のヒット商品である。このことは、あまり日本では知られていない。アメリカの「Amazon.com」の「Kindle Community」で「Average Kindle Owner's Age」というフォーラムを見ると、Kindleを持っている人のほぼ半数以上が、50歳以上なので驚く。

【Kindle所有者の年齢構成】 61歳以上：16% 51-60歳：30% 41-50歳：24% 31-40歳：19%

これは、本好きの中高年が、紙の本より価格が安いので、Kindleを通してデジタル書籍を買っているからだろう。また、本屋に行くのが億劫だからという中高年も、Kindleの愛好者だと思う。読書家ならば、新刊書をすぐにでも手に入れたいから、Kindle効果は大きい。ただし、若い世代は、PCやスマートフォンによりなじんでいるので、あえて書籍端末を買おうとはしないようだ。したがって出版社は、このへんを読み間違えないように、Kindleにコンテンツを提供していかねばならない。

しかし、日本の中高年がKindleを買うかどうか、そのへんのところはまったくわからない。日本の中高年のほうが、アメリカに比べて、「紙」に留まり続けるような気がする。

Kindle(U.S. & International Wireless) \$279.00